甲状腺機能亢進症ニ伴フ下痢

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2017-10-04 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/2297/38163

Wien. 1910. S. 218—220. 4) Derselbe, Handbuch der Cystoskopie. 3. Aufl. Leipzig. 1911. S. 208—209. 5) v. Frisch u. Zuckerkandl, O., Handbuch der Urologie. Bd. 2. S. 723—730. Wien. 1905. 6) Güterbock, P., Die Krankheiten der Harnorgane. Bd. 1. S. 403—407. Leipzig-Wien. 1890. 7) Jacoby, S., Lehrbuch der Kystoskopie. Leipzig. 1911. S. 144. 8) Nitze, M., Lehrbuch der Kystoskopie. 2. Aufl. Wiesbaden. 1907. S. 245—258. 9) Ribbert, H., Geschwulstlehre. Bonn. 1904. S. 354—358. 10) Rotschild, A., Lehrbuch der Urologie. Leipzig. 1911. S. 203—210. 11) Watson and Cunningham, Diseases and surgery of the genitourinary system. London, 1909. Vol. 1. p. 494—543. 12) Wolff, J., Die Lehre von der Krebskrankheit. 2. Teil, Jena, 1911. S. 895—896. 13) 鶴田禎次郎, 醫事新聞第六五八號. 14) 阿久津三郎, 醫事新聞第六九七號. 15) 阿久津三郎, 順天堂醫事研究會雜誌第四一六號. 16) 阿久津三郎, 順天堂醫事研究會雜誌第四四八號. 17) 中野等, 皮膚科泌尿器科雜誌第十一卷第七號.

●甲狀腺機能亢進症ニ伴フ下痢

武者素行（四十二年卒業）

甲狀腺機能亢進症竝ニバセドー氏病ニ下痢ノ傾向アルハ一般ニ知ラル、所ニシテ、然モ普通「カタール」症ニ伴フ下痢トハ多少趣ヲ異ニスル所アルガ如シ、然シテ舊來甲狀腺機能亢進症及バセドー氏病ノ療法トシテハ、主トシテ沃度劑ノ內服及外用療法或ハ鐵劑麥角、「アトロピン」、「チレオイヂン」ヲ內服セシメ、器械的障碍アルモノニハ手術療法ヲ行ヒタリ

近時甲狀腺機能ノ詳細トナリシ以來甲狀腺ノ病理竝ニ療法ニモ一新紀元ヲ劃セリ、特ニバウマン氏ガ一定ノ沃度化合體「チレオイヂン」ヲ甲狀腺ノ尋常產生物トシテ證明シ、メービウス氏ガ甲狀腺トバセドー氏病間ノ親密ナル關係ヲ證明セシ以來著シク變化ヲ來シ益々諸家ノ研究ノ步ハ進メラレタリ、其結果過般マツクスカーネ氏ハ在來ノ沃度療法ハ却テ病勢ヲ助長セシムル者トシテ之ヲ排斥シ、同時ニ食餌療法即チ牛乳、牛清、「ヨーグル」、酸乳、牛酪、卵、「パン」、穀類、野菜、食鹽類、新鮮且ツ熟シタル果實ヲ勸メ、其他電氣療法ヲ行ヒ、內服藥トシテハ燐酸鹽類特ニ「オイケフアリン」（單燐酸「カルシユーム」○・○二、次亞燐酸「ナトリユーム」○・○五燐酸「カルシユーム」○・○三炭酸「マグネシア」○・○一）ヲ稱用シ其ノ有效ナルヲ發表セラレタリ、折シモ余ハ同患者ニ遭遇シ大略マツクスカーネ氏ニ從テ治療ヲ行ヒ、好結果特ニ下痢ニ就テ奇異ナル成績ヲ得タリ、ヨツテ左ニ述ベテ諸家ノ參考ニ供シ併セテ爾後ノ敎導ヲ仰ガントス

患者　佐藤某　三十三歲ノ婦人

素因　遺傳的素因トシテ特記スベキ事ナシ

既往症　乳腺炎ヲ患ヒタル外著患ナシ

現症ノ既往症　六年前ヨリ甲狀腺腫アルヲ自覺ス、心悸亢進著シク下痢ノ傾向アリ、灼熱感、發汗、不安、不眠、眩暈、神經興奮アリ漸次羸瘦セリ、本年三月頃ヨリ病勢益進ミ、特ニ下痢晝夜六乃至七行ニ及ビ每回强度ノ腹痛ヲ伴ヒ全然水樣便ナリ、其他惡寒アリ多少ノ發熱アリ、乾咳ヲ頻發セシ爲メ、肺結核及ビ腸結核ノ診斷ヲ受ケタルコト有シガ如シ、

三、四ノ醫治ヲ乞ヒ治療ヲ繼續セルモ下痢ハ頑固ニシテ止マズ、遂ニ十月ニ及ビ漸次羸瘦ス

現在症　初診、十月三日

體格中等　榮養不良、中等度以上ノ羸瘦、心悸著シク亢進シ、脈搏頻數、發汗アリ、甲狀腺ハ左右共ニ鷄卵大ニ腫脹ス、腹部ハ弛緩シ雷鳴アリ壓痛ナシ、下痢ハ六乃至七行ニシテ當時ハ無痛ニシテ水樣、脾、肝異常ナシ、肺ニハ異常ヲ認メラレズ、其他メーヒユーウス氏症狀グレーフエ氏症狀ステルワーグ氏症狀等ハ缺如ス、恥骨上ニ手拳大ノ腫瘍ヲ觸ル

診斷　甲狀腺機能亢進症、妊娠三ケ月

治療　食餌療法ヲ主トシ即チ一般魚、鳥、獸肉ヲ禁ジ野菜、牛乳、「パタ」、粥、卵、「パン」ヲ食セシメ熟シタル果實ヲ試ミタリ、藥物トシテハ「ブロームナトリユーム」、「ビスムート」一・〇次亞燐酸「カルシユーム」二・〇ヲ與ヘシニ、下痢ハ二乃至三日ニシテ全ク止ミ普通一乃至二行トナリ、尙咳嗽、發汗、發熱等全ク止ミ心悸亢進竝ニ一般症狀輕快シ、昨今甲狀腺モ多少縮小スルニ至レリ、而シテ初メ三、四ノ醫治ヲ乞ヒタル際ハ、イヅレモ野菜、果實等ハ固ク禁ゼラレ、胃腸ノ治療ヲ受ケタルニ不拘下痢ハ依然トシテ止マラザルニ反シ、余ノ野菜、果實、牛乳等即チ一般下痢ニ際シテハ却テ下痢ヲ增惡セシム可キ物ヲ與ヘ、收斂劑トシテハ一・〇ノ「ビスムート」ヲ與ヘ然モ頑固ナル下痢ノ停止ヲ見タリシ、即チ一般ノ下痢ト本病ノ下痢トノ相違スル點ナラント考フ、依テ玆ニ愚見ヲ述ベ諸家ノ參考ニ資スル所アラバ好甚矣

●能力ノ根源

櫻井小平太

余此頃表題ノ如キ一小册子ヲ得タリ一讀スルニ醫藥同臭ノ諸君ニハ頗ル興味アラント信ス因テ譯シテ本會ニ投ス會員諸君一瞥ヲ賜ラハ幸甚

時勢ノ進歩ト共ニ糖尿病ニ對スル種々ノ藥劑ガ發見サレ其當時ハ大ニ賞用セラルレ𪜈彼等ノ多クハ初ノ評判忽チ霧散シ朝顏ノ花ニモ劣ル僅カノ盛リヲ名殘トシテ深ク忘却ノ海底ニ葬去ラル

糖尿病幷ニ肥滿病ニ對スル滋養物トシテ眞實且繼續シテ賞用セラル、モノハ「アロイロナート」ノ外他ニ其類ヲ見ズ

病ヲ治スルニ藥劑ヲ用ユルハ素ヨリ至當ノコトナレ𪜈右ノ外ニ Diät 即チ飲食攝生アルヲ忘ル可カラズ就中糖尿病幷ニ肥滿病ノ如キハ寧ロ其 Diät ヲ必用トス而シテ同病ニ對スル其ヲ施行センニハ前記ノ「アロイロナート」ニ若クモノナシ

今ヲ距ル「大約二十五年ウエストフアーレン州ハム市ニ於テフンドハウゼン博士ガ初メテ植物性ノ蛋白製劑トシテ「アロイロナート」ヲ市上ニ紹介シ次デギチチンゲン市ノエプスタイン博士ガ糖尿病幷ニ肥滿病ニ唯一ノ滋養品トシテ醫藥社會ニ輸入セシ爾來同品ハ甚シキ廣告ヲ爲サヾリシモ本品ヲ最モ必用トスル醫藥業者ト病者ノ範圍ヲ脫シテ世間一般ノ好評ヲ博スルニ至レリ是レ全ク本品ガ特リ糖尿病者ト肥滿病者ニ對スルノミナラズ一般ニモ亦タ滋養品トシテ非凡ノ効力アルガ爲メナランカ然リ而シテ此盛況ヲ來タシタルハ必竟學術的滋養試驗ニ基因セル第一流ノ專門名家ノ燒クガ如キ